広報 安達太良

R 4. 2. 7　撮影

【巻頭言】

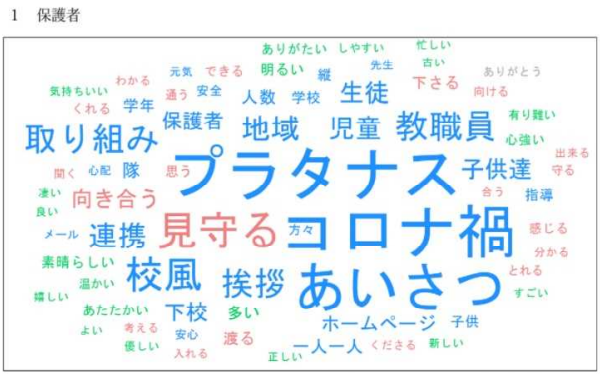
ＩＣＴ化の流れと学校

二本松市立油井小校長　大内　剛

オズボーン氏が、「近い将来、４７％の仕事がＡＩやロボットに代替される可能性がある」という衝撃的な論文を発表して７年。様々な場面で現実味を帯びてきたように感じる。店には、セルフレジが増えてきた。ＧＰＳの情報を利用し、無人で動くトラクターは、既に売られている。入店から出店まで一度も店員に会わずに済む回転ずしもあるそうだ。また、ＡＩ技術により、翻訳や自動運転、医療画像診断や囲碁といった人間の知的活動に、ＡＩが大きな役割を果たしつつある。今、子どもたちがなりたい仕事は、大人になる頃には、存在しないかも知れない。

本校でもＩＣＴによる校務処理が進んでいる。職員会議は、ほぼペーパーレスである。学年主任会もタブレット端末を校長室にそれぞれが持参して開催するとともに、グーグルのチャット機能を使って、簡易な事務連絡をほぼ全て行っている。

また、「教育に関する評価（グーグルフォームによる回答）」の膨大な自由記述を「テキストマイニング」で分析（右の図）もしている。無料のアプリなので、もちろん深い分析は、学校がやらなければならないが、自由記述に繰り返し出てくる言葉、キーワードなどは参考とすることができる。



さらにＧＩＧＡスクール構想で導入された一人一台のタブレット端末についても、一ツールとして授業への導入も少しずつ進んでいる。挙手をして発表するのは人数に限りがあり、紙やホワイトボードに書いて発表すると時間もかかった。タブレット端末を使えば、瞬時に画面上に全員の意見を可視化することができ、さらには、集計や、意見の異なる児童同士でのグルーピングにより、自分と違った発想の共有や知識をより深く理解し、活用できるようになると期待できる。全ての学びでのＩＣＴ活用を考えるのではなく、ＩＣＴを使った方がよい学びと、これまでも効果的だった学びを、熟慮して使い分ける必要がある。

オズボーン氏が、「近い将来、仕事がＡＩやロボットに代替される可能性がない職業」として、「保育士」「小・中学校の教員」などを挙げている。しかし、油断はできない。一方的に知識・技能を伝授するだけの教育を続けていたら、すぐにＡＩやロボットに取って代わられるだろう。

ＡＩは、特定の内容を効率的に学習するツールとしては秀でているが、一方で、「考える力」や「学ぶ意欲」「創造力」をＡＩによる学習だけで育むのは難しいと言われている。

教室において重要なのは、子どものちょっとしたしぐさや表情などの非言語を敏感にキャッチして、個に応じた最適な問題を出してあげたり、助言したりすること。教師の経験や勘が問われるのは、まさにこういったところであろう。「思いやり」「折り合い」「意思決定」「なすことによって学ぶ」ことなども学校ならではの学びと考えられる。

変化の激しい、先行き不透明なこれからの社会を生き抜くために、どのような資質・能力を子どもたちに育む必要があるのか、私たちは、日々自らに問いかけながら教育活動を進めていかなければならない。キーワードは、子どもたちも私たち教師も「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断し行動すること」ではないかと考えている。

【特集テーマ】

一人一人の目が輝く学校づくりを目指して

二本松市立岳下小学校　　草野　和代

この２年間、新型コロナに振り回されてきた。感染防止策ばかりが気になり、毎日の教育活動を疎かにしてはいなかっただろうか。次年度の教育課程編成に取り組んでいる今、改めてこの問いに向き合っている。

本校児童は、「明るく素直」である。授業にもしっかりと取り組んでいる。経験豊富な教職員が多く、信頼関係も十分に築いている。しかし、この２年間で登校しぶりが増えた。学校に楽しさを見いだせず、交友関係に悩んでいる児童がいる。

「コロナを乗り越える」を胸に、子どもも保護者も教職員も最大限の努力をしてきた。しかし、そのベクトルは、内側を向いてはいなかったか。「できないこと」に縛られてはいなかったか。

コミュニティ・スクール導入に向けて夏休みに行った研修会では、教職員はもちろん、ＰＴＡ役員や学校評議員も、学校づくりについての夢を語り出した。コロナ禍における新たな取組としての「岳下スポーツフェス２０２１」では、６年生が目を見張るような活躍をした。苦しいときほど、「夢や希望」や、強い思いをもってエネルギーをぶつけられるものが必要なのである。

子どもたちは、やりたいことやなりたい自分を思い描くことができれば、自ら動き出していく。これは、私たち大人も同様である。共に夢を語り合うことで可能性は広がり、互いに刺激し支え合うことで持てる力を発揮できる。コロナを乗り越える鍵は、「前向きさ」である。「共に」と「主体性の発揮」を学校経営の要として、子ども一人一人の目が輝く学校づくりに邁進していきたい。

【特集テーマ】

花と緑に親しむ未来

二本松市立大平小学校　　伊藤　比呂美

福島県花き振興協議会様のご協力を得て、６年生がお花のアレンジメントに挑戦しました。ＪＡふくしま未来様からの支援で、県内で栽培された花材（トルコギキョウやユーカリなど）をいただいての学習となりました。本校の隣には、ＪＡの大平集出荷所があり、トルコギキョウや小菊が納められるのを目にします。子どもたちは気づいていないようで、地域の特色として学んでほしいという気持ちもありました。

アレンジメントを体験した子どもたちは、「あまり花や葉などの植物を触ったり、よく近くで見たりすることが少ないから、植物に触ったり、じっくり見たりできてよい経験ができたと思う。楽しかったから、家でも家族と生け花をして植物との関わりを深めたい。」、「はじめてやったけど、結構きれいにできてよかった。花たちも生きてるって感じがした。」、「同じ植物なのに、茎の硬さがまったく違った。同じお花なのに、友だちのとは、お花が違った。人と同じだなと思った。」など、子どもらしい純粋な感性で気づきがたくさんありました。

お家の方からも、「自分も相手も思いながら作る花育で幸せになりました。」などの感想をいただきました。今後も、花と緑に親しむことのできる活動を大切にしたいと思います。

【特集テーマ】

「難しいことを簡単に」
～向き合う時間の確保のために～

本宮市立五百川小学校　　佐藤　聡

校務支援ソフトがあちこちで導入されているのを耳にすることがありますが、依然として、「時間割・週案（月案）」については、蚊帳の外？のようです。特に、特別支援学級担任にとって、月末の交流学級との調整を踏まえた時間割作成は、最大の課題といっても過言ではありません。

本校では、今年度、知的学級に５学年の児童が、情緒学級に３学年の児童が在籍しております。交流学級との時間割の調整は、自作のツールで行っております。交流学級からは、学校のサーバー内の特定フォルダに、毎月提供される時間割の電子データを「はじめ」というボタンを押すと一覧に読み込まれ、画面上で、特別支援学級特有の教科等に時数をやりくり調整します。時数のプラマイ調整が終了したら「おわり」というボタンを押すと、特別支援学級在籍児童の各学年の時間割が完成します。通常学級の週案は月２枚で、教科等名や単元名進度数○／○は、自動で埋め込まれるので、時間割さえ完成させれば、後は、ボタンを押すだけで、他に何もすることがありません。

一方、特別支援学級担任の週案は各学年２枚×在籍学年数分となり、本校の知的学級では、合計１０枚となります。「全学年の週案を１つに統合することはできないだろうか？」・・・これは、長年の夢でした。今年度中には、特別支援学級用ツールのバージョンアップ版を完成できる見通しが立ち、新年度用に提供する予定です。

「たくましく生き、ともによりよい未来を創っていく子どもの育成」のためには、子どもたちと向き合う時間の確保が最重要と考えております。特別支援学級担任のためにも「何としても完成させたい」と心に決め、現在もプログラミングに孤軍奮闘しているところです。

【特集テーマ】

生きてはたらく力

本宮市立岩根小学校　　児山　秀典

２０年前「生きてはたらく力を身につけていく子どもの育成」というテーマの下、当時の校長先生はじめ様々な先生方と検討を重ね、全職員一丸となって仮説の検証を試みた。その時、授業を検証する視点として大切にしていたのが「課題提示後の子どもの反応」である。吟味に吟味を重ねた課題が多く、子どもたちの食いつき、意欲は即座に垣間見えた。しかし私たちは、検証の視点をその先に置いていた。課題を知り、達成や克服の意欲を持った子どもたちが、何を頼りに、どんな方法で、どんな関わりを始めるか等がそのポイントである。つまり前時までの授業をとおして、子どもたちが新たな課題に出合ったとき、これまでの学びを生かして、自ら課題解決の一歩を歩み出せるのかということである。様々な学習や生活経験、学んだ知識や技能と課題を関わらせて見通しを持とうとしているか、見通しが持てているかは、「これまでの授業が、本物の学びとして生きているか否か」をまざまざと見せつけた。

あまりにも丁寧に課題解決の見通しを持たせる手立てを講じた場合、授業者は既習内容の定着の度合いを十分に見とれないはず。つまり課題と出合い、解決に関わる知識・技能や学び方の経験を「自ら探しに行く力」を見とれない可能性がある。授業にふれる時、今でも私はこの「自ら探しに行く力」の見極めを大切にしている。課題提示後、自ら既習内容や学びの経験と関連を子どもたち自らが探り出す、その営みを大切にしたいということである。この営みは、授業者にとっては指導についての評価であり、子どもたちにとっての力の発揮、活用である。

変化の激しいこれからの社会に生きる子どもたちのために、目の前に現れた困難・課題を自らの力で乗り越えるたくましさを育てていかなければならない。教材や課題との出合わせ方の工夫により子どもたちの学習意欲・知的好奇心を刺激し、もとになる力、関わる力、振り返る力等を駆使させながら、学習内容はもちろん生活習慣や夢の実現に向けた努力等、身近な課題解決やめあての達成に「学んだことが生きてはたらく」ような力を育てる学校経営・運営に努めていきたい。

【特集テーマ】

困難さから道を拓く

本宮市立白岩小学校　　鈴木　茂

白岩小学校は、二つの大きな課題を抱えながら教育活動に取り組まなければなりません。一つ目は、コロナ対策、二つ目は、福島県沖地震により体育館が使えないことです。そこで今年度は、「可能性を見いだし教育を前に進める」ことを方針とし、ＰＴＡと思いを共有しながら推進しています。

【工事中の体育館】

そのような中、体育館以外に広い場所がない本校にとって、学習発表会は最大の難局でした。既成概念から抜け出せずにいると、結論は「中止」です。集会活動をリモートで実施しているので可能性はあるものの、発表する場所の解決が課題でした。このままでは、今年度の方針を実現できません。そこで方向性を変え、事前録画した画像をユーチューブ配信することにしました。

すると、「直接子どもの姿を見たかった」という声はありましたが、挑戦を後押しする反響が数多く寄せられました。例えば、「家族全員で見ることができた」「何回も見ることができた」「他の学年の発表も楽しめた」「遠くから見るよりも子どもの成長が感じられた」「中止かと思っていたのに実施してもらいありがたい」「先生方の苦労に感謝したい」「新しい方法を次に生かしてもらいたい」などです。

可能性を見いだして実現したとき、それまで以上に、学校への理解者、協力者が増えるのを感じました。また、困難を乗り越えようと努力する子どもたちにとっても、よりよい未来の創り手となる礎を築くことになっています。

この経験からも、明日からの教育活動を前に進めていくのは、校長の責務と考えています。

【趣味･随想】

雑　　感
～初心者のゴルフから考える～

二本松市立二本松北小学校　　大内　雅之

ゴルフを始めました。きっかけは、友達の８０歳を過ぎたお父さんからの一言でした。「そろそろ、ソフトボールに代わる生涯楽しめる遊びを見つけた方がいいよ。ゴルフどう？」

私は、高校・大学そして教員になってからもソフトボールを楽しんできました。しかし、年齢が上がるにつれ、仕事や体の具合を言い訳に随分と距離をおいていました。「何の準備もいらないよ。すべて準備するから。」という甘い誘惑もきっかけとなりました。

「ボールが小さくなるとはいえ、止まっているボールだし、当たればなんとかなるだろう・・・」とりあえずやってみました。結果は・・・。空振り、真横へ、上の屋根直撃、前へ飛んでも右へ左へ、ゴロあり、チョロあり。テレビで見るようなゴルフの弾道は一球もなし。あれ？それでもソフトボールでは考えられない飛距離やボールが飛び出すスピード、爽快感は今までに味わったことがないものでとても魅力的でした。

それからというもの友達のお父さんを「師匠」と呼びながら練習を始めました。週末の練習場通いはもちろん、本を買ったり、YouTube にあふれるゴルフ動画を見たり、庭に穴を掘ってパターの練習をしたり、・・・。ああでもない、こうでもないの繰り返し。気がつけば、朝校門前で子どもたちを迎えながら自分でも気づかないうちにスイング練習をしていたりする始末。

しかし、そのいずれも誰かに強制されたり指示されたりしたものではありません。全く主体的な活動です。学校での学習もこんなに風に主体的に取り組ませることかできたらいのになあ。学習内容・方法？環境や指導者の魅力？課題の難易度？工夫の余地の有無？成長の自覚？情報活用？

なかなか上達はしませんが、今日も練習したいと思っています。ゴルフってなんか面白いかも。

【趣味・随想】

日本一のふるさと

二本松市立渋川小学校　　鈴木　規男

「日本一のふるさと」

作詞：令和３年度渋川小５年生

ふくしまの　にほんまつ　しぶかわに
こいをしたんだ　ぼくは　ふるさとのすばらしさに

ふくしまの　にほんまつ　しぶかわで
ずっと住んでたい　ぼくは　日本一の場所で

またひとつ　笑顔が　増えてくよ　すてきなことだよ
明日も　心がぽかぽかで　いれますように（伝えよう！）

ちょうちん祭り　きれいだ
きくの花も　美しい
すてきな町だね　わたしは　二本松が好き

支えてくれる　かしの木
こころにひびくよ　たいこ
じまんの学校　わたしは　渋小が好き

「日本一のふるさと」と題したこの詩は、５年生１２名の子どもたちが、道徳科の発展的学習として作詞に取り組み、１２月に完成しました。基になるメロディは、猪苗代湖ズの「I love you & I need you ふくしま」です。

現在は、全校生に披露しようと練習を重ねています。教務主任のギターの音色にのった子どもたちの歌声は心にしみます。

第７次福島県総合教育計画 の施策には「福島を生きる」 教育の推進が提唱されています。

本校でも

「二本松　渋川を生きる」

学校教育を推進していきたいと思います。

この歌詞の２番には次のような言葉があります。

「♪ふくしまの　にほんまつ　しぶかわは
　優しい人が　あふれる　あたたかい場所さ♪」

【趣味・随想】

安達太良山　縄文人の思い

二本松市立新殿小学校　　紺野　真一

新殿小学校から国道４５９号線を西へ１km 程の丘に、安達太良連峰から吾妻連峰まで一望できる絶景ポイントがある。実はこの場所、「宮ノ下遺跡」が眠っているところでもある。

「岩代町史２」によると、宮ノ下遺跡は、縄文中期の遺跡で、渦巻文が美しい深鉢(甕)などが出土している。他にも炉跡が４～５か所あり国道の両脇にかなりの大集落があったと予想されている。

縄文中期（５５００年～４４００年前）、ざっくりだがエジプトではピラミッドが作られていたころだ。その頃から、このようなすばらしい文化をもった人々が新殿にも住んでいたのである。

新殿小学区には、尾根筋の道が多い。縄文人たちは山を見ながら尾根を歩き、彼の地を選んだのだろうか。もしかしたら、この頃はまだ安達太良山が噴煙を上げていたのかもしれない。安達太良山を神とあがめつつも、十分に安全な距離をとって、この地に根をおろしたのだろうか。

私は、昔から人が住んでいる場所には、先人が積み重ねてきた経験に基づく合理性があると考えている。街の人はなぜこのような不便な場所に住むのか不思議に思うかもしれないが、古くから高台にある家は、冬場でも一番に朝日を浴び朝から暖かい。尾根筋の道を歩けば、外敵が来たことをすぐ察知し対処することができる。

便利で平和な世の中では無用の知恵である。しかし、いわゆる「未曾有の災害」に見舞われるたび、災禍を乗り越えたであろう先人たちの知恵と勇気に、私は思いを巡らすのである。

【趣味・随想】

「風の時代」

大玉村立大山小学校　　舘脇　一弘

これまでの２００年は、目に見える資産形成に価値が置かれ、組織の伝統、我慢や根性が大切とされてきた「土の時代」。これからの２００年は、情報や形の無いもの、伝達や教育が重視され、想像力、思考力が大切とされる「風の時代」になる変革の時だそうです。急速に一人一台タブレットが配布され、子ども達がスムーズに操作する姿をみていると「風の時代」の到来を感じます。新時代を生きる子ども達の力を伸ばす、大人の関わり方についてのあるインタビュー記事が心に残ったので一つご紹介します。

Ｑ「宿題をなかなかやろうとしない」という悩み

Ａ宿題？やる気がないならさせなくていい。そもそも、学校が出した宿題が本当に子どもにとって必要な宿題かという点も考えた方がいい。子ども自身が宿題の意義を感じられていないからやらないだけだ。自分で学ばなければ、何も身につかない。その日着る服だって、全部子どもに決めさせればいいんだ。もし気温が低い日に子どもが半袖で登校しようとしたらどうする？おそらく多くの親が「風邪を引くといけないから、すぐに長袖に着替えさせよう」と考えるだろう。しかし、俺が考える正解は「半袖を着せたまま登校させる」だ。半袖を着たまま玄関の外に出て、「寒い」と思ったら、子どもは家に戻って着替えるだろうし、外に出ても「我慢できる」と判断したらそのまま通学する。その後に教室で過ごしながらやっぱり寒かったら、「明日は長袖で行こう」と本人が決めるはずだ。この“自分で気づいて決める”プロセスが成長には不可欠なんだ。もちろん、子どもが風邪を引いている時に同じことはしない。「道路に飛び出すな」ということも当然、教える。

命に直結すること以外は、子どもに任せた方がいい。

桜木　健二先生　談

【趣味・随想】

２０２２　私の趣味

大玉村玉井小学校　　小林　雄

試合より楽しみと言ったら大げさかもしれないが、私は高校野球の試合前のシートノックを見るのが大好きである。わずか７分間だが、私は７分間の芸術作品だと思っている。そこには、それぞれのチームの日頃の練習の姿が凝縮されている。趣味のない大人である私にとって、高校野球観戦は数少ない心が弾む楽しい時間である。

世界中で新型コロナウイルスとの戦いが続く中、１年の時を経て東京オリンピック・パラリンピックが昨夏、開催された。「無観客」「マスクの着用」等コロナ禍のオリンピックで選手たちは自らの限界に挑み、仲間と力を合わせ、支えてくれた、応援してくれた人たちの思いに応えるため力の限り戦った。その姿に大きな感動を受けた。

そして、高校野球もまた、コロナ禍に翻弄されたが、そんな状況の中でも、顔を上げ、懸命に白球を追う球児の姿から元気や勇気、そして熱いものをたくさんもらった。

「〇〇高校、ノックにお入りください。時間は７分間です。」というアナウンスが流れるとベンチ前に整列していた選手がグラウンドに走り出す。最初はボール回し。その瞬間、遠い過去がよみがえる。３０数年前、キラキラした高校球児であったあの頃の自分を重ね合わせているのだろうか。私は、試合前のシートノックを見るのが大好きである。

２０２２の私の趣味？目標？夢？まずウエイトを落として、ちょっとだけ体を鍛えたら、あの頃の球児だった自分に少しだけ甦られるだろうか。そして、昔の仲間や地域の方々等と楽しく真剣に白球を追いかけたいなあと静かに考えている。